

単なるセフレのはずの王宮騎士団のイケメンエースが
なぜか身分違いの俺に激しく執着してきます



イーサン

本作の主人公。
長年シヴァを一途に
思い続けている。

シヴァ

王女の護衛騎士。
容姿端麗、
魔法も剣の腕も一流。

マヤ王女

一見清楚でおしとやかだが、
意外に打算的で思ったことは
ずけずけと言う王女。

アリヤン

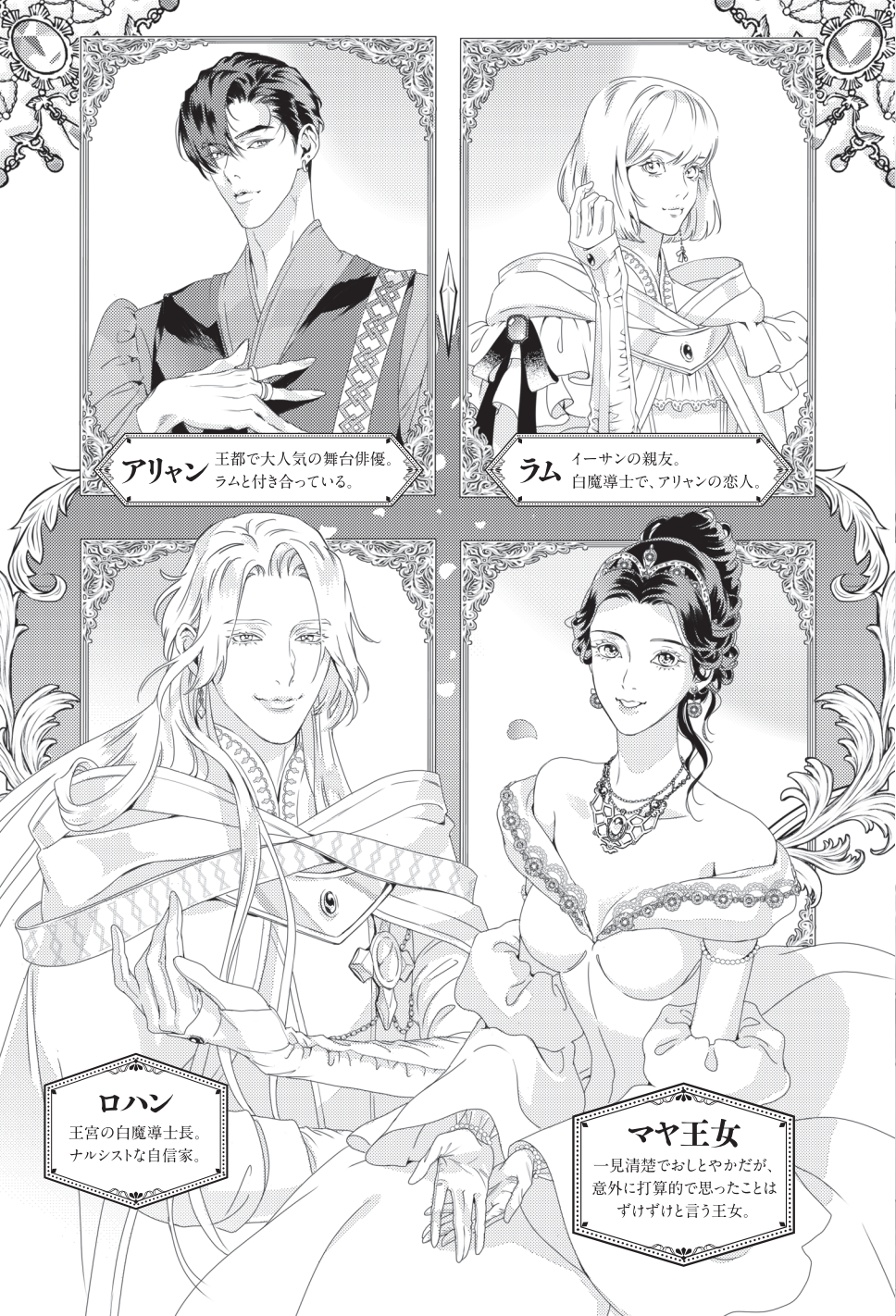
王都で大人気の舞台俳優。
ラムと付き合っている。

ラム

イーサンの親友。
白魔導士で、アリヤンの恋人。

ロハン

王宮の白魔導士長。
ナルシストな自信家。



目次

単なるセフレのはずの王宮騎士団のイケメンエースが
なぜか身分違いの俺に激しく執着してきます

7

番外編 マリアージュ・デュエル

269

単なるセフレのはずの王宮騎士団のイケメンエースが
なぜか身分違いの俺に激しく執着してきます

プロローグ

「あの、俺でよければ……、あなたを癒やさせてくださいっ！」

俺——イーサン・シャルマの言葉に、目の前の翡翠^{ひすい}の瞳が、すっと細められた。

——この国の王女の護衛騎士、シヴァ・ミシュラ。

宝石のように美しい、透き通った緑色の瞳。額にかかった長めの艶やかな黒髪。神が作ったかのような、寸分の狂いなく完璧に整った容貌。

騎士にふさわしく見事に引き締まった長身は、黒に錦糸の刺繍が入った、格調高い近衛師団の制服に包まれている。

「……」

「……」

見つめ合う俺たち。

遠くからは、王宮のメインホールでまだ続いている、舞踏会の音楽が聞こえている。

身を震わせるほどの冷たい風が、俺とシヴァの間を吹き抜けていく。

「お前……」

低く発した声。明らかに不審なものを見る眼つきで俺を睨み、眉間にしわが寄る。

だが、そんな怪訝な表情を浮かべたとしても、目の前のその人は、今まで俺が出会った誰よりも美しかった。

そう、彼こそが、俺が長年想い続けてきた、初恋にして人生最後の恋の相手と、心に決めた人。

そして、どんなにがんばっても、俺には絶対に手が届くはずがないとあきらめていた、雲の上の存在でもあった。

つまり今までの俺は、王宮の中を凛々しく闊歩するシヴァを、物陰から見つめるだけで精いっぱい。シヴァに近づくことはおろか、言葉を交わすチャンスなど、あるはずもなかった。

しかし俺は、ついさきほど、この国きつての美男子と名高いシヴァが、長年仕えてきたマヤ王女に、あっさりと振られた現場に偶然遭遇してしまった。

だから……、俺は……、ついucciかり自分の立場も忘れて、シヴァに身の程知らずな提案をしてしまったのだ。

冷たい夜風が頬をかすめていく。同時に、俺の背筋に冷たいものが走った。

そのとき、シヴァが俺に向かって足を一步踏み出した。

殴られる！

俺は思わず目をつぶった。

だが。

「お前は……、男だろう？」

シヴァが発した言葉に、俺は恐る恐る目を開けた。

俺の予想に反して、シヴァは戸惑ってこそのるものの、怒っている様子はなかった。

俺は思わず、ぐくりと唾を飲みこんだ。

これはもしかしたら、神様がくれた一生に一度のチャンスなのかもしれない！

「男だからいいって言う人も、たくさんいます。ほら、女性相手だと、いろいろややこしくなりもするし、でも男相手なら後腐れもないでしょ？」

いかにも遊び慣れた雰囲気で、俺はへらつと笑った。

本当は心臓が口から飛び出しそうだったが、そんなこと、シヴァに悟られるわけにはいかない。

「へえ、後腐れもない、ね」

シヴァが品定めするように俺を見る。

「そう、お互い気持ちいいところがわかってるし、ストレス発散に俺はもってこいですよ。嫌なことなんて、全部俺が忘れさせてあげます！」

震える手を隠すように、俺は後ろで手を組んだ。

もし俺が、友人のラムみたいに華奢で可愛い容姿の男だったら、ここで小首をかしげたりなんかするところだろうが、残念ながら俺は、上背もそれなりにあるごくフツの見た目。

しかも今日は、厨房で芋の皮をむきすぎたせいで手はガザガザだし、着ている木綿のシャツもズボンもしわしわだ。なんなら、スーパの染みが前身頃についている。

くそつ、今夜憧れのシヴァ様に会えるってわかっていたら、もうちょっとマシな恰好で出勤して

きたのに。

「ストレス……、嫌なこと……」

俺の言葉に、さきほど王女から受けた仕打ちがよみがえったのだろう。シヴァの顔が、みるみる青ざめていった。

「あ、あの……、ごめんなさい。俺、ちょっと舞い上がってしまったて、余計なことを……、本当は、俺っ」

慌てて言い繕う。俺ときたら、シヴァを目の前にして、ちょっと調子にのりすぎてしまったようだ。

——この世界には、二種類の人間がいる。

ひとつは、生まれつき魔力が高く、魔法を使える人間。王族や貴族といった特権階級のほとんどがこちらだ。まれに平民でも生まれつき魔力の高い者がいて、そういう者は特別な教育を受け、魔法使いや宮廷勤めなどの職に就くことが多い。

そしてもうひとつは、魔力自体は持っていない、その量が少ないために魔法を使えない者。この国ではこちらの人口が圧倒的に多く、いわゆる平民である俺もこっちに属する。

そうだな。相手は高度な魔法も使える、選ばれた階級の貴族様。

かたや、生活魔法もままならない、ド平民の俺。

いくら大好きな王女にこっぴどく振られて、捨て鉢になっているとはいえ、こんななんのとりえもない冴えない男に、天下のシヴァ様が情けをかけてくれるなんて、あるはず……

だが、一步後ずさった俺の手首を、シヴァはむんずとつかんだ。

「ヒッ……」

「行くぞ」

「ひえ、え!？」

振り返った翡翠の瞳が、俺を射抜いた。

「お前が、癒してくれるんだろう？ この俺を。それとも、さきほどの言葉はただのはったりか？」

そのとき、雷に撃たれたみたいな衝撃が俺を貫いた。

どうしよう……、かつこよすぎる。

やっぱり、好き！ めちゃくちゃ、好きっ！

「ふあ、ふあいつ、も、もちろんっ、俺が！」

腑抜けた返事をする俺の手を引き、シヴァはずんずん歩き出す。

その騎士団の制服の黒いマントをはためかせた広い背中を見つめ、俺は思った。

これって、もしかしてオッケーってこと!?

……ということは、もしかして、今日が俺の初体験!^{コトバケン}

第一章 王女に捨てられた男

話は少し前にさかのぼる。

「あー、疲れたあ。チヨプラさんってば、相変わらず俺のこと、こき使いすぎだよ……」

肩をぐるぐると回しながら、俺はひとり、王宮の裏門へ続く秘密の近道を通り抜けようとしていた。

ひんやりとした夜の空気が、労働を終えて疲れた身体に心地よい。

今夜は王宮の舞踏会。

宮殿の大広間ではきつと今も、着飾った王族や貴族たちが、笑いさざめきながら、ダンスを楽しんでいるのだろう。

今日は、このただっ広い宮殿自体が浮足立ったような雰囲気包まれている。遠くに見える白亜の建物からは、宮廷音楽隊が奏でる優美な調べも聞こえてくる。

しかし俺は、ただのしがない王宮の食堂の料理人。

しかも王宮所属の料理人といっても、貴族や近衛騎士や役人たちに料理を提供する宮廷料理人などではなく、王宮の端っこにある、出入り業者や召使たちが利用する第三食堂の勤務だ。

業務内容は料理だけでなく、荷物運びから掃除まで、あらゆる雑用に追われる日々。

いつもなら、俺にとっては舞踏会などなんの関係もないのだが、今夜は国賓を招いて行われた『マヤ王女の婚約披露晩餐会&舞踏会』。

客人の数がけた違いで、宮廷料理人だけでは手が回らないとかで、第三食堂勤務の俺も助っ人として借り出されたというわけだ。

舞踏会の応援部隊と聞いていたので、晩餐会での給仕を命じられて、王女の護衛騎士として控えているはずのシヴァの姿を間近で見られたりして……あわよくば、声をかけられちゃったりなんかしちゃったり……

なーんて、ドキドキしながら王宮の調理場に向かった。だが。

「はははっ。なーにをふざけたこと言ってたんだ。会場にいらっしやるのは王様、王女様、それに隣国の王族やこの国一番の貴族様たちだぞ。俺たちなんかおいそれとお目にかかれる方々じゃねえ」

脳内でおめでたく膨らんでいた俺の妄想は、上司にあたる筆頭シェフ（といってもただの食堂のコック長だ）のチョプラの言葉で、一瞬にして打ち砕かれた。

「さあ、さつさと手を動かして、目の前の仕事を片付けろ、イーサン！」

そして、いつもより上等な白いコックコートに身を包んだチョプラは、上機嫌で俺に大量の芋の皮むきを命じた。

それから俺は、ただひたすらに芋の皮をむき続けたのだった。

無事、王宮の調理場での業務を終え、俺は帰途についた。いつもの薔薇の茂みにさしかかったところで、ふと足を止める。

——誰かいる。

いつも利用しているこの王宮内の北西にある道は、ほとんどけもの道と言っている細道。つまりは道と言えるような代物ではなく、宮殿から裏門への最短距離というだけの木々の茂みであった。もうすでに薔薇の花は散ってしまっているの、咲き誇る大輪の白い薔薇を眺めにくるようなご婦人たちなどいない。

王宮広しと言えど、今の時期は俺くらいしか利用していないと思われる、こんな誰も来るはずのない場所に、もし用があるとすればそれはただひとつ。

——秘密の逢引。

案の定、茂みの中にある小さな空間からは、言い争うような男女の声が聞こえてきた。

俺は思わず足を止め、その会話を耳をすませる。

「そんな話、私は到底承服できませんっ！」

語気を荒らせているのは、近衛師団の制服に身を包んだ黒髪の男。

「もう決まったことよ。明日には王命が下るわ。シヴァ、今まで私のためにずっと尽くしてくれてありがとう。私は新しい護衛騎士、サンカル・ダヤルとともに隣国へ嫁ぎます」

なんと、そこにいたのは、まさに今日の舞踏会の主役であるマヤ姫と、そのマヤ姫との関係がい

つも世間で話題になっている護衛騎士シヴァ。

シヴァに寄り添うようにして立っているマヤ姫は、その艶やかな黒髪を高い位置でまとめ、月の光みたいなクリム色の幾重にも重なった薄い生地がキラキラ光ったドレスを身に着けていた。

ドレスと同じ色の宝石が耳元と首元にも飾られ、息を呑むほど美しい。

一方のシヴァは、いつもの黒に金色の刺繍が映える凛々しい近衛師団の制服。

まさかこんなに近くで、シヴァ・ミシユを拝むことができるなんて！

結局、晩餐会の最後の最後まで、王宮の調理場から一步も出ることがなかった俺。

この奇跡とも言えるめぐり合わせに、神に感謝した。

俺は薔薇の茂みに隠れるようにして身を屈め、固唾を飲んでふたりの成り行きを見守る。

本当に、いつ見ても憎らしいほどお似合いのふたり。

俺はシヴァに熱烈に恋していたが、自分とシヴァがどうこうなるなんて思うほど、世間知らずではない。

「どうして私を置いていかれるのですか。殿下、私の何がいけなかったのでしょうか？ 教えてください。ただればすべて直します！」

シヴァの叫びは悲痛だった。

それもそのはず、シヴァはマヤ王女の護衛騎士に任命されて以来、絶対的な忠誠を誓い、常に寄り添って、陰となり日向となり、王女を守ってきた。

その献身的な愛は、王宮のみならず国民にも広く知られており、マヤ王女とシヴァの間柄を「理

想的な姫君と騎士」として、ロマンス的な意味で応援している者たちも多かった。

だが、やはりマヤ王女は一国のプリンセス。そして、この世界でも大変珍しい『聖魔法』の使い手でもある。

『聖魔法』とは、癒しや守護、浄化の力を持つとされる神聖な魔法だ。とても万能で『神の力』ともされるほどだが、使える者はごくわずかしいない。

シヴァのプラトニックな騎士道的愛は実を結ばず、このたび王女は、あらかじめ決められた隣国の王子のもとへ嫁ぐことになったのだ。

「シヴァ、落ち着きなさい。あなたは本当に立派に職務を果たしました。あなたに落ち度などありません」

「では、なぜですか？ 私があのサンカル・ダヤルに劣るとは到底思えません。なぜ、私ではなく、サンカルなのですか？」

——サンカル・ダヤル。

その名前の男を、俺も知っていた。

サンカルは高位貴族で、いわゆる将来が約束された近衛騎士だ。

シヴァよりはいくつか年上だったが、昔から常に、シヴァの好敵手として世間では噂されていた。一流の家柄と剣の腕だけでなく、シヴァと同様に攻撃に特化した黒魔法である『攻撃魔法』の使い手で、その上容姿も整っており、年上のご婦人からの人気は絶大だと聞く。

攻撃魔法は単体でも強力だが、剣に纏わせて使うと破壊力が飛躍的に高まり、圧倒的な一撃を放

つことができる。

だが王宮の騎士団の中でも、使える者は限られた者だけだ。

俺は、あの如才ない金髪の色男の顔を思い浮かべていた。

たしかサンカルは一年ほど前から剣術の腕を磨くという目的で、隣国に留学していたはずだが、いつの間に戻ってきたのだろうか。

そのサンカルが、シヴァに代わってマヤ王女の護衛騎士となる。

それは、シヴァにとってはおそらくこれ以上ない屈辱であるはずで……

「シヴァ、あなたも知っているでしょう？ 世間では、私とあなたとの間柄を邪推する者が少なからずいるようです。そんなあなたを、私の結婚相手の王子がいる国に連れて行くわけにはいかないのです」

マヤ王女のすみれ色の瞳が陰る。

「私の愛は崇拜のみ。殿下に何も求めてなどおりません。ただ、殿下のために私の人生をすべて……」

シヴァの訴えに、なぜかマヤ王女は大きくため息をついた。それから、あきれたように首を横に振る。

「ああ、もうっ。そういうところが重いつて言ってるのよ」

唐突な言葉に、シヴァはぼかんと口を開ける。

「で、殿下……？」

自分の言葉の何がまずかったのかわからず、シヴァは困惑の色を隠せない様子だった。

その様子を横目に、マヤ王女は堰を切ったようにまくし立てる。

「あのね、シヴァ。あなたと私は幼馴染で、私のことを姉のように慕ってくれているのはよくわかってるのよ。でもね、はつきり言って、私はあなたに自分のことを犠牲にしてまで、側にいられたくはないの」

そこまで言ってから、マヤ王女は一度息を整えるように言葉を切る。しかし視線はまっすぐシヴァに向けていた。

「私はね、あなたにそんなものを求めているのではないの。ちゃんとした相手を見つけて、あなたには幸せになってほしいのよ」

その声音に嘘はなかった。

「殿下……!？」

シヴァはただ呆然とマヤ王女を見つめている。

そして俺も陰からその様子を見守りながら、まったく同じ反応をしていた。

あんなマヤ王女を見るのは、初めてだ。

「シヴァ、あなたは見た目がいいし、剣の腕も確かだし、家柄もいい。はつきり言って引く手あまたよ！ それなのに、どう？ 私というせいで、いまだに婚約者のひとりもないじゃない」

マヤ王女が一気に畳みかける。

シヴァはまったく口を挟めずにいた。

「私は嫌なのよ。私のせいであなただがずっと独り身で、さみしく朽ちていくなんて」
そこまで言ったマヤ王女は、ぐいっと一歩踏み出し、シヴァとの距離を一気に詰める。強引とも言えるその動きに、さすがのシヴァも思わずのけぞった。

「どうせ、私に遠慮してデートすらしたことないんでしょう？ 当然、そういう経験も皆無に違いないわね。二十歳を過ぎた騎士が童貞だなんて、ああ、なんということでしょう！」

「どっ、どうして……？ 殿下っ!？」

まさか王女の口からそんなセリフが出てくるとは!? たおやかでおしとやかな姫君で通っていたマヤ王女だが……

驚きのあまり固まってしまった様子のシヴァに、マヤ王女はにつこり微笑む。

「これでわかったでしょう。さあ、もう戻らないと。きつと今頃血眼になって、サンカルが私を捜していますわ」

「殿下っ……」

シヴァの絶望に満ちた声。

「シヴァ、あなたはもう舞踏会に戻る必要はないわ。私にはもう、サンカルがついていますからね」

マヤ王女はそつとシヴァの腕に触れた。

「あなたはこれまで私の側にいてばかりで、ほとんど自由のない生活だったでしょう？ これからは羽を伸ばして、あなたにお似合いの可愛い伴侶をじつくりと探してちょうだい。素敵な出会いが

あるといいわね」

「そんなっ、殿下……っ」

「また明日、謁見の間で会いましょう。王命が下るより先に、私からあなたに伝えておきたかったのよ。では、ごきげんよう」

縫いつくように伸ばしたシヴァの腕をすりとかわすと、マヤ王女はくるとシヴァに背を向け、俺がいるのとは反対方向の茂みに歩いていつてしまった。

足音を立てずに優美に歩くその姿は、高貴で美しい猫のようだ。

「殿下……っ、殿下……っ、どう、してっ……」

がくりと片膝をつくシヴァ。

——シヴァ………!

そして一部始終を目撃してしまった俺は、がっくりとうなだれているシヴァに、ついに声をかけたのであった。

第二章 嘘と誤解と弁明と

そして、現在。

俺の手を引くシヴァは、ずんずんと王宮の門へ向かっていく。

「で、どこへ行けばいいんだ？」

衛兵たちに奇異の目で見られながらも、王宮の裏口を出たところで、俺の手を引くシヴァが、くるりと振り返った。

「え……!？」

なんとシヴァは、何も考えず歩き出してたらしい。

「お、俺の家っ、ちよつと歩いたところなんで、狭いけど、よければ、そこに……」

「わかった。案内してくれ」

シヴァは俺の横に並び、腰を抱き寄せた。

「……っ！」

硬直する俺の身体。

人並みの身長俺よりも、さらに頭ひとつ分高いシヴァ。

俺の身体に回した腕は逞しく、時折ふれる身体からは、なにやらしい匂いすらする。

あのシヴァが、今、俺のすぐ隣に。

なんかもう、これ、夢、かな？　っていうか、俺、もうすぐ死ぬのかも？

でも、ひと時の夢でもいい。神様に見せられた、最後の幻でもこの際いい。

ああ、もう、ずっとこのかぐわしい空気を吸っていたい！

天にも昇る気持ちだったが、家が近づくにつれ、俺は急に我に返った。

シヴァが、本当に俺のうちに!?

あの、家というよりは、どちらかというとむしろ小屋に近い、あの俺のボロ家に？

っていうか、もちろん朝起きてすぐ出てきたから、ベッドメイキングなんてできているはずもなく、シーツはぐしゃぐしゃのままだ。

どうしよう!?

王宮内の食堂で働いている俺は、王宮のあつせんで、王宮に勤める貴族や騎士、職員たちの住む王都の高級住宅街のほずれに、居をあてがわれていた。

だがその実態は、もちろん立派なお屋敷などではなく、住宅街の端にある、小さな森に隠れるようにして、ひっそりと建っている小屋だった。

昔は森の管理人が住んでいたのだが、引退して田舎に引っ越してしまっただけで、ちようど空きになっていたため、ひとり暮らしで荷物の少なそうな俺にたまたまあてがった、というわけだ。

そしてそこは家というよりは、丸太造りの小屋といった方が正確だ。

王宮の下級騎士たちの独身寮よりも、ずっとずっと粗末な住居。

そんなところに、今を時めく、シヴァ・ミシユラ様を招き入れるなんて……
そんな罰当たりなこと、俺にはできないっ！

「……どうした？」

急に足を止めた俺の顔を、シヴァはのぞき込んできた。

「あの……、やつぱり、ごめんなさい。俺には、できませんっ」

俺はシヴァから離れると、身体を直角に折り曲げて頭を下げた。

「は？」

「俺……っ、見た目はこんなだし、家もあれだし……。だから……、一晚の情けをかけてもらうに
したって、どうしてもあなたには釣り合うとは思えません」

俺は頭を下げたまま身を震わせた。

「夢はやつぱり、夢のままなんです。だから……、突然大それたことを言って驚かせてしまって、
すみませんっ。ですから、さっきのことは忘れてくださいっ……」

「顔を上げる」

冷たい声に恐る恐る顔を上げる。すると凍るほどに冷えた緑色の瞳が、俺を見下ろしていた。

シヴァは俺の顎に指をかける。

「逃がさない」

「え……？」

「いったいいくらで雇われた？ どうせ下町の男娼のたぐいだろう。誰の差し金なのかは知らない

が、ここで俺に声をかけたこと、じっくり後悔させてやる」

シヴァは俺の首根っこをつかむと、まるでズタ袋みたいにひょいと肩に担いだ。

「わああああっ」

——俺は、男娼なんかじゃない、絶対に！

でも、さっきの嘘を信じ切ってしまったらしいシヴァは、俺のことを「その手の仕事に慣れている、金さえ積めば誰とでも寝床に入るような男」だと思っているに違いない。

「ここで痛い目に遭いたくなかったら、さっさとお前の根城を吐け」

「はっ、はい、わ、わかりましたあ」

——もしかして俺、今からシヴァにボコボコにされたり、する!?

* * *

シヴァに担がれたまま、俺の住む、王宮の住宅街のはずれにある森の小屋に到着した。

「ここか。……なるほど、ここなら城からも近いから商売がしやすいだろうな」

俺に無理矢理案内させた小屋をひと目見て、シヴァは言った。

「ごめんなさい、俺やつぱり無理です！ 全然部屋が片付いてないし、そもそもここは、あなたみたいな高貴な方を招き入れていい場所では……」

俺は叫んだが、シヴァは問答無用とばかりに森小屋のドアを蹴り開けた。

「ヒッ……」

目の前に広がっているのは、今朝出てきたそのままの、俺の居住空間。

入ってすぐに目に入るのは、食事をしたり、書き物をしたりするために置いてある粗末な木のテーブル。それとおそろいの椅子には、乱雑にタオルや衣類がかかっている。

そして間仕切りも何もないその部屋の一番奥にあるのが、これまた粗末な木のベッド。

もちろんシーツは、寝乱れたまま。

ああ、こんなみっともない状態の俺の部屋を、憧れのシヴァ様に見られてしまうとは、穴があったら入りたい。

「ここがお前の商売部屋、というわけだな」

何かを勝手に納得したシヴァがつぶやく。

「あの、俺っ、決して商売をしているわけでは……」

「フン、表向きはそういうことにしているというわけか」

これまた勝手に何かを誤解したシヴァは、そのまま部屋の奥に進むと、俺の身体をどさりとベッドに落とした。

「狭いな……」

そして当然のように、俺の上に乗ってくる。

「本当にここでいつも男の相手をしているのか？」

「ちょっと待ってください！」

マントを脱ぎ捨ててシヴァに、俺は待ったをかけた。

翡翠の瞳が細められる。

「なんだ？ あんな誘いをかけてきて、怖気づいたとは言わせない。たしか、お前が慰めてくれるんだっただな？」

シヴァは俺の肩をぐつと押した。

「俺は今、何もかも全部に猛烈に腹が立っているんだ、お前のご自慢の性技で、今夜は嫌なことをすべて忘れさせてくれるんだろう？」

まさに王女に捨てられ、失意のどん底。やけくそになっているシヴァは、俺のシャツに手をかけた。

俺はその手をむんずとつかむ。

「考え直してください。ほら、目をしっかり開けてよく見て。俺、男ですよ。しかも、別に可愛くもないフツウの見た目です。王女様とは似ても似つかない……」

「男だからいいと言ったのはお前だろうが。それに、殿下のことは口にするなっ」

乱暴にシャツを引き寄せられ、ボタンがはじけ飛んだ。

やばい、火に油を注いじゃった？

俺は慌ててはだけたシャツをつかんだ。

「お、落ち着いてくださいっ。だから、俺はあなたが一夜の過ちを犯す相手としてだって、絶対にふさわしくないんですってば。あなたなら、どんな美女も、もちろん美少年だって思いのまま……」

「そうか、わかった。お前まで俺を拒絶する気だな。……そうだ、俺は殿下に捨てられた男だ。俺にはもう、価値など、ないんだ……」

低い声に顔を上げると、これ以上なく悲しそうな顔のシヴァがそこにいた。その切なげな表情に、俺の胸はきゅうつと締め付けられる。

傷ついた小さな子供みたいな顔ですら、壮絶に美しい……ってというか、好き。

——大好き！

そして俺は、心に決めた。

そう、これはこんなシヨボい俺に神様がくれた、最初で最後のとっておきのプレゼントなのだと。だから俺は、両手を広げてシヴァをぎゅつと抱きしめた。

「あなたは誰がなんと言おうと素晴らしい人です。価値がないなんて、ありえませんか！」

「……っ」

温かい身体。

俺はしばらくシヴァをぎゅつと抱きしめていた。

はああああああ、幸せ、すぎるう。

思いつきり鼻から息を吸い込み、この匂いを堪能する。

シヴァは俺からゆっくり身体を離すと、俺をじつと見つめた。

「お前は、俺を受け入れてくれるのか？」

「も、もちろんです。身に余る光栄です」

もう心臓が訳がわからないほど高速ビートを打っていて、頭の中は大太鼓や小太鼓が鳴り響き、まさにしゅちゅかめつちゅかといった状態だが、なんとか俺は答えた。

「ふっ……」

俺の言葉に気をよくしたのか、シヴァはほんの少し笑った。

「ぐっ！」

俺の脳では処理できないほどの事態に、自我は崩壊寸前だ。

「このひと時、すべてを忘れさせてくれ……」

シヴァは俺の頬にその大きな手のひらを添えると、俺に顔を寄せてきた。

「……っ」

その美しい顔がゆっくりと近づいてくるのを、俺は瞬きもせずじつと見つめていた。もしかして、これは……、これは……

「ああーっ！ ちょ、ちよつと待ったあ」

だが、あろうことか、俺はあのシヴァの美しいお顔を、手で押しのけてしまった。

「この期に及んでなんなんだ。やはり、お前は俺のことを……」

みるみる不機嫌になっていくシヴァ。

「違うんです。お願いです。後生です。後生ですから、俺に準備を、準備をさせてください！」

俺は、ベッドの上でひれ伏した。

だって、だって、だって！ 俺が最後に食べたものって、今日の晩餐会で余った芋を丸めて、衣

をつけて揚げたやつだよ。もちろん、スパイシーな香辛料もたっぷりつけて。そもそもって、日中に大量の芋をあっちやこっちへ運んだせいで、汗だつていつも以上に、いっぱいかいている。

ただでさえみすばらしいのに、その上不潔だなんて。しかもそれが、一生に一度きりのシヴァとの夢の夜だつていうんだから！

「準備……？」

シヴァが眉根を寄せる。

「そう、そう、そうなんです。ほらっ、男同士つて、女性相手と違って準備が必要なんです。だから、ちよつと、ほんのちよつとだけ、待っててもらえますっ!？」

友人のラムからもらった、男同士のハウツー本で仕入れたにわか知識を、さも何もかも知っているかのように披露した俺は、慌ててベッドから飛び降りると、一目散で入り口側の洗面所に駆け込んだ。

もちろん湯を沸かしている暇なんてないので、冷水を頭からかぶって身を清め、口をゆすいでからハープを一枚口を含み、ラムがくれたいい匂いのする練り香水を耳の後ろに擦り付ける。

それから俺は、戸棚の奥にある秘密の小箱に手を伸ばした。

まさか、これを使う日がくるとは。

白い小箱にはこれまたラムからもらった、いわゆる滑りをよくする「潤滑油」が入っていた。そして隣には、男性器を模した妙にリアルな張り形。

こんなことになるなら、怖がつたりせず先に自分ですっかり慣らしておけばよかった。

俺は未使用のままの張り形に、そつと指で触れた。

そう、俺は何を隠そう、まっさらな身体だ。誰とも付き合ったことはないし、性経験など皆無。なにしろ、俺が生涯愛を捧げると決めたのは、シヴァ・ミシユラのみ。

妙に乙女チックなところのある俺は「アンタの初恋なんて、どうせ実るわけないんだから、さつさとその辺の男で、初体験済ませちゃえば？」なんていう悪友の囁きには決して首を縦に振らず、一途にシヴァに操を立て続けてきたのだ。

しかし今の俺といえば、シヴァには、経験豊富な遊び慣れた男として認識されてしまっている。どうしよう!? そんな後腐れのないはずの一夜限りの相手の俺が、まさかの未経験だなんて。

バレたら、確実にドン引きされてしまう。

そんな面倒くさい相手はお断りだと、怒って出て行ってしまうかもしれない。それどころか、詐欺の罪でその場でたたき斬られてしまったり……

ガタン、と居間兼寝室から音がして、俺は我に返った。どうしたつて、時間がない。

もうこうなったら、やるしかない！

俺は潤滑油の入ったガラス瓶を手に、扉を開けた。

——シヴァが、いる。俺の家に。

もしかしたら精霊か何かに騙されていただけで、戻ったらそこには誰もいなかった……なんてオチになるのではないかと心配したが、シヴァは確かにそこにいた。

ぼんやりとした表情のシヴァは、所在なげに俺のベッドに腰掛けていた。

それだけでも手を合わせて拝みたいくらいだというのに、今から俺は恐れ多くも、その逞しい腕に抱かれようとしているのだ。

脳内が沸騰しそうな興奮を抑えて、俺はベッドに近づいた。

「用意は済んだのか？」

「はい」

俺がうなずくと、シヴァは俺に手を伸ばした。

「こちらへ」

ああ、もう、どうしよう……

顔が、顔がよすぎる。

そして、シヴァはそのままベッドに俺を押し倒した。

さすがは王女様の護衛騎士。

腹が立っているという言葉とは裏腹に、俺に触れるシヴァの指はとても紳士的だった。

「あ……っ、ん……」

ベッドの上で抱き寄せられ、首筋に優しくキスが落ちた。

もう、この時点で死んでも何も悔いはない！

シヴァの温かい手が、俺のシャツの中にもぐりこむ。

「は、あ、ああ……っ」

背中をまさぐられてビクビクと身体が震える。俺は思わず、シヴァの騎士服の背中を握り締めた。

「ずいぶん、敏感だな。さすがに、慣れているだけのことはある」

慣れているどころか、他人に触れられることも初めての俺。

だが、シヴァがいい感じに誤解をしてくれているみたいだから、そのままこれ幸いと流れに任せる。

——ああ願わくは、このまま時が止まってほしい。

俺の力が抜けたところで、シヴァがおもむろに身体を離れた。

「口づけても、いいのか？」

翡翠^{ひすい}の瞳が、俺を窺う。

「は、い……」

俺が見つめ返すと、シヴァは無言で俺に頬を寄せてきた。

そういう商売をしている人たちは、唇だけは客に許さない。そんなことを思い出したときには、もうすでに唇は重なって……

もちろん、これが俺のファーストキス。

神様、ありがとうございますっ！

最初は触れるだけだった口づけは、どんどん激しくなってきた、ぬるりとした舌が俺の舌に絡みつく、もう何も考えられなくなっていた。

「ん、あ……」

「……ふっ……」

俺は夢中でシヴァの口づけに応える。

もう、何もかもが夢みたいで！

唇が離れると、シヴァが熱っぽい目で俺の腰を引き寄せた。

「なかなか、悪くない……。だが悪いが、俺は男との情事について知識がないんだ。だから……」
はだけられたシャツからのぞく俺の胸に、シヴァは手を這わす。

「大丈夫です。あなたは、何もしなくていいです。俺が、全部、しますから……」

俺はシヴァの手を取って、その長い指に口づけた。

だが、そういう俺の知識は、すべて友人のラムから借りた、男同士のロマンス小説から得たもののみ。

俺は、この難局を乗り切れるのか！

とにかく、心を落ち着けて……

俺は深呼吸すると、目の前の首元までしつかり止めた騎士服の金のボタンに手を伸ばした。

——そうだ、思い出すんだ。たしか、ラムから借りた小説の中に『騎士と男娼の切ない恋物語』があつたじゃないか。

どう見ても俺は、はかなげな美貌で男たちを虜にする魔性の男娼つてタイプではないが、この際そんなことはどうでもいい。

あの、思わず十回は読み返してしまった、騎士と男娼の初めてのベッドシーンを、思い出すんだ。

そして、その通り手順を進めることができたら、きつと俺だつて。

「あなたは、何もしなくていい……」

気持ちだけは麗しの男娼『ファム』になりきった俺は、ひとつずつシヴァのボタンを外していく。騎士服は頑丈なつくりで、ボタンがかつちりと留められているため、俺の震える指では大変苦戦したが、なんとかすべて外すことができた。

その中に着ている上等の絹のシャツに手を伸ばそうとしたところで、俺はシヴァに力強く引き寄せられた。

「あ、あのっ……」

どうしよう、小説の中じゃ、こんな手順じゃなかったはず。

たしか『ファム』は騎士の服を脱がせて、自分も素っ裸になると、その逞しい身体に覆いかぶさつてご自慢のテクニクで……

「これ以上焦らすな、もう待てない」

シヴァの言葉通り、固く立ち上がったものが俺の腹に当たる。

あのシヴァが、俺で勃起しているなんて。

妙な感動に打ち震えたのもつかの間、俺は半ば破かれるようにシャツをはぎ取られていた。

——こんな強引なシヴァ様、ますます惚れる！

っていうか俺は、決してもったいぶって焦らしているわけじゃなくて、単に手際が悪いだけなんです……

「もう、いい。お前は、何もしなくていい」

覆いかぶさってくるシヴァの潤んだ瞳に見下ろされる。

「俺に、すべて委ねろ」

——わーん、これじゃ、立場が逆になっちゃうんですけどっ!?

シヴァは騎士という職業柄、どんなことでも受動的になるのは我慢できないのか(だとしたらあの小説はリアリティに欠けると言わざるを得ない)、はたまた俺の手際が悪すぎて、単にこいつには任せておけないと思っただのか、なぜかすっかりシヴァが主導権を握ることになってしまった。

シヴァは目を細めると、俺の髪を優しく梳いた。

「怖いのか? 震えているぞ」

シヴァの言葉に、俺ははっとして首を横に振った。

「違うんです、そういうんじゃない」

なにしろこういうことが初めての俺。いくら今まで恋焦がれてきたシヴァがその相手だとしても、俺は少しばかり、いやかなり緊張していた。

「大丈夫だ。傷つけたりなど、しない。優しくする」

シヴァは言葉通り、壊れ物を扱うみたいに丁寧に、俺の裸の上半身を、そっと指でたどっていく。

「んっ、あ……」

「感じるのか?」

身体中を優しく愛撫しながら、耳元で囁く。

その低い美声に、俺の身体はますます昂って……

「あっ……、んっ……、気持ちいい、です……」

羞恥に顔を赤らめながら答えると、シヴァは俺の唇に軽いキスを落とした。

「とてもいい顔だ。もっと、感じさせてやる」

シヴァは微笑むと、今度は俺の首筋に舌を這わせた。熱い舌が俺の全身を舐め取っていく。

そして……、何がどうなっているのかはわからないが、とにかく俺は……

「あっ、んっ、はっ、あ、ああ……」

「いい声だな」

——気づくと俺は、シヴァの下でめちゃくちゃに喘いでいた。

っていうか、男相手で勝手がわからないとか言っていたの、どこの誰?

それとも、ベッドの中じゃ女も男も大して差はないとか!?

ってことは、シヴァはやっぱベッドの中でも、百戦錬磨のつわものってこと……!?

えっ、でもマヤ王女はシヴァにはそういう経験がないとか、言ってなかったっけ?

ああ、もう、だめだ。気持ちよすぎて、訳がわからない!

「だめっ、あ、ソコ……っ」

男同士の利点というべきなのか、それとも天性の勘のよさか、シヴァが与える刺激は的確で、俺はその指でたやすく追いつめられてしまった。

「つらそうだな、一度出すか?」

耳たぶを甘噛みされると、俺の背はぐんと反ってしまう。

「やつ、あ、ああっ！」

「楽しませてくれるじゃないか。なるほど、よほど自信があるのだな、こういうことにかけては……」

シヴァはしたり顔で、俺の裸の胸に手を這わせた。

「んっ……」

「貧弱なのかと思ったが、意外にいい筋肉のつき方をしている。客を喜ばせるために鍛えているのか？」

観察するようにつぶやくと、俺の乳首をぺろりと舐めた。

「客、なんて……、ひゃ、あっ！」

——だから、俺は男娼なんかじゃないんだって……

でもシヴァはそんな俺の反応に満足したのか、匂いを嗅ぐように俺の胸元に唇を寄せた。

「本当に感覚がいい。こうやってたくさん男を楽しませているんだな」

「ちが……うっ」

「あんなに大胆に俺を誘っておいで、今さら清純なふりが通用するとも思うか？ ほら、ここが赤く色づいているぞ」

吸い付かれると、腰がずんと重くなる。

「も、う、や……、だ」

俺はシヴァの頭を両腕で抱きしめると、その黒髪を引っ張った。

「もう降参か？」

くぐもった笑い声には愉悅の色がにじんでいる。

「お願いっ、も、出ちゃうから、俺にもっ……」

このままじゃ、癒してあげるところか、ただ、俺がシヴァに一方的に気持ちよくされているだけじゃないか！

涙目で懇願すると、シヴァはあっさり俺から離れた。

「そうだな、まだまだじっくり楽しませてもらおう」

シヴァは荒々しく、纏っていた絹のシャツを脱ぎ捨てた。あらわになったのは素晴らしく鍛え上げた上半身。

本当に、見事すぎる……

シヴァは息を呑んだ俺の顎をつかみ、上向かせた。

「まさか、俺が男に欲情する日が来るとはな」

「あの、触っても、いいですか？」

おずおずと切り出した俺。了承の返事の代わりに、引き寄せられた。

裸の肌が触れ合い、思わず吐息が漏れた。

もう、これだけでイっちゃいそう。

俺はシヴァの首すじにキスを落とすと、下穿きの前を緩め、そつとその中心部の屹立に手を伸ば

した。

すごく、大きくて、硬くて、とにかくすごい……

握り込むと、ビクリとそれが震えた。

「はっ……」

耳元で、シヴァが熱い息を吐く。

感じてくれるんだ……

感動やら、興奮やら、ドキメキやら、いろいろな感情がごちゃ混ぜになる。

少しでも気持ちよくなってもらおうと、手に力を込めて、緩急つけてさばいていく。

「気持ちいい、ですか？」

「すごく、いい……」

耳元で低い声で囁かれると、それだけで俺は精神的に昇天してしまいそうになった。

「もっと、感じてください、俺が……っ」

上目遣いでシヴァの様子を確認して、さらに手を早めようとしたところを、なぜかやんわりと止められた。

「あの……？」

「……ほかに、誰がいる？」

「え？」

シヴァが俺の瞳をのぞき込む。

「王宮の貴族か？ それとも王都の商人を相手にしているのか？ もしかして、俺の知っている人間もいるのか……？」

「なんの、こと……？」

「お前は、こうやって、いつも男を誘っているんだろう？ 今、お前が関係している人間は誰だ？ 何人いる？」

「……！」

そうだ。俺って、そういう設定だった。

初めてのこの状況に舞い上がっちゃって、すっかり忘れてたけど。

はっとする俺に、シヴァが怪訝な眼差しを向ける。

「あの、その……」

どうしよう。詳細までちゃんと考えてなかった。

でもここで、「実は俺はなんの経験もなくて、こういうことするのはあなたが初めてです！」なんて言ったら……

確実に、捨てられる。っていうか、この場で斬り殺される！

今、シヴァが相手にしているのは、あくまで遊び慣れて後腐れのない、一夜限りの相手なのだから。

本当はあなたのことが大好きで、初めての相手があなたです、なんて重すぎる真実、この状況じゃ、どんな男だって尻尾を巻いて逃げ出したくなるに決まっている。

「どうした？　もしや言えないような相手なのか？」
俺はかぶりを振った。

どうする？　こんなとき、遊び上手な軽薄な男だったらどんなふうに答える？
そのとき俺の頭の中に、友人のラムから借りた、別のロマンス小説のあらすじが不意に浮かんだ。
そこに出てきた当て馬役の美少年は、まさに今俺がなりたいたいと思っている小悪魔的な男たらしで、
たくさんの男を遊び半分に手玉に取っては、その心を踏みにじっていた。

「……あのさ、そういうのは言いつこなしにしようよ」
美少年のセリフそのままに、俺は言った。

「は？」

シヴァの眉間にしわが寄る。

「お互い、ストレス発散の気持ちいいコトするだけの関係だろ？　今日限りのあなたが、俺のほか
の相手のことなんか知ってどうすんの？」

「お前……っ」

「そんな興ざめなこと、聞かないでよ。今この瞬間は、俺はあなただけのものだよ。それで、いい
でしょ？」

チュ、といかにもスレた感じで、唇に軽くキスをしてやる。

シヴァは一瞬目を丸くしたが、次の瞬間、なぜかすぐく怖い顔になった。

「……そうだな。深入りは禁物だ。お前は、ただのストレス発散の相手にすぎないのだから」

「……」

自分で言ったセリフだというのに、シヴァに反芻されるとズシリと心に重く響いた。

俺はいつたい何を期待しているんだ!?

憧れのシヴァに、一夜限りだとしても、情けをかけてもらえるんだ。

これ以上の何を望む？

俺はわざとらしくにつこりと微笑んで見せた。

「さあ、続きをしようよ。口でしてあげようか？　俺の舌使い、皆に好評だよ？」

これまた小説の中から、そのままパクったセリフを吐くと、シヴァはにやりと笑った。

「それは、次の機会に取っておこう。今日は……、お前をとことん苛めてやりたい気分だ」

「え……!？」

横たわっている俺に、また覆いかぶさってくる。

え、ちよつと待って!?　次の機会って……、ナニ!?

「とことん苛めてやる」と言ったくせに、俺に触れるシヴァの指はあくまで丁寧で、どこまでも紳
士的だった。

「あつ、やつ、だ、めっ……」

シヴァの指が、からかうように俺の肌をなぞっていく。

「何がだめなんだ？　腰が揺れているぞ」

全裸に剥かれ、両手を一掴みに頭の上でまとめられる。

シヴァにリードされるがまま、与えられる刺激に、俺はただただあられもない声を上げるのみ。
「目を閉じて」

これ以上なく美しい顔が近づいてくる。

「ん……」

ぎゅっと目を閉じると、しつとりと唇が重なった。

優美で甘い口づけ。思わず吐息をもらすと、ぬるりと熱い舌が咥内に入ってくる。

「んっ、あ……」

「そう、もつと吸って。俺に応えて」

思わず目を開けた俺。じつと見つめる翡翠^{ひすい}の瞳が、俺を絡め取る。

「ああ、もう……」

「とても、いい……」

シヴァの手のひらが、俺の頬を包み込む。その仕草は、まるで本当の恋人にするみたいに甘美で溺れそうになる。

本当にシヴァは素晴らしく意地悪で、優しく触れる指にイキそうになる俺を、何度も寸止めにしては楽しんでいる。やがて裸の身体を絡ませるようにして、俺はシヴァに懇願した。

「あ、お願い……、もう……、許して……」

「どうしてほしいのか、言ってみろ」

俺は息も絶え絶えで、シヴァの耳元でうめいた。

「もう、イキたい……、お願い、イカせて……」

涙目で見上げると、シヴァは満足そうに喉を鳴らす。

「その顔、たまらない。お前のこと、もつと知りたくなる。お前の全部を、見たくなる……っ」

ぐっと力強く握りこまれ、素早く手を動かされた。

「はっ、あっ、ああああああんっ！」

次の瞬間、まるで自分のものとは思えないほど高く甘えた声を出して、俺は果てた。

そしてこの一連の出来事に、もうすっかり許容適応範囲を超えていた俺は……、そのままシヴァの腕の中で気を失ってしまった。

第三章 小悪魔と次の約束

鳥のさえずりで、目覚める朝。森小屋に住む、俺のいつもの日常だ。

「やばっ、寝過ぎしたっ!？」

いつもより深い眠りについていたいみたいで、慌てる俺。

アレ？ えーっと、昨日は……？

晩餐会の仕事帰りに、偶然シヴァに出会って、それでそれで……

「ん？」

だがベッドの隣には誰もいない。しかも俺は裸ではなく、いつもの寝間着をきっちりに着込んでいた。きよろきよろとあたりを見渡せば、なんの変わりもない、いつも通りの自分の部屋。

「えーっと」

もしかして、全部夢だったりする!？」

* * *

「んなもん、夢よ、夢！ 夢に決まってるでしょーが」

揚げたての芋をほくほくと頬張りながら、俺の悪友キリカ・モディはそうのたまった。

第一騎士団の青い制服に身を包んだ長身の女性——かなりの凄腕の騎士であるキリカは、これまたかなりの凄腕である白魔導士のラム・ノディアルとペアを組んで、魔獣討伐の実績を上げ続けていた。

この国では、人々の暮らしのすぐ側に「魔獣」と呼ばれる危険なモンスターが存在する。

森や山奥、時に街道沿いにも現れるそれらは、人に害をなす脅威であると同時に貴重な資源でもある。討伐された魔獣の肉は、適切に処理すれば食用になり、市場では高級食材として重宝されている。

そして危険な魔獣を討伐するのは、この国の騎士たちの役目である。

この王宮には、近衛師団と王国騎士団が存在する。

近衛師団は、常に王や王族の傍らに控え、あらゆる脅威から主君を護るために剣を振るう。

一方で、国全体の治安と領土の防衛を担うのが王国騎士団である。騎士団は第一から第三まで三つの部隊に分かれている。中でも第一騎士団は、最も優れた騎士たちで構成された精鋭部隊であり、対外抗争や大規模な魔獣討伐など、危険度の高い任務を一手に担っている。

そして白魔導士は、病気や怪我を治す回復魔法を操り、人々に癒しと安らぎを与える存在だ。その力の重要性から国に手厚く保護され、身分も高い。その称号を得るには、生まれつきの才能に加え、魔法学校を卒業することが必須となっている。

だから、この国の騎士様であるキリカも、白魔導士の称号を持つラムも、本来なら平民の俺がお

いそれと声をかけていい相手ではない。

キリカは第一騎士団に所属する女性騎士で、食堂のランチタイムが一段落して混雑が落ち着いたところで、遅めの昼食をとり、いつもこの第三食堂に来ていた。

本来なら騎士専用の第二食堂を利用するはずだが、少し前に偶然食べた俺の揚げ物がめっちゃ気に入ってしまったらしく、こうして第三食堂に毎日通い詰める常連さんとなってしまった。

加えて年が近いこともあり、いつの間にか気の合う飲み仲間となっていたのだ。それからキリカの紹介で、彼女のペアである白魔導士のラムとも自然に仲良くなり、今では彼と俺は親友の間柄にある。

「……だよな。あまりにも都合がよすぎるもんな」

俺はキリカの向かいに座り、テーブルの上で頬杖を突く。

「そうね、じゃなきゃ、何かの精霊にでもからかわれたんでしょうよ。ほら、おとぎ話にあるじゃない」

キリカは、もうひとつ芋をつまんで口に入れた。

「それか、あのシヴァのことを想うあまり、アンタの頭の中で妄想と現実がごっちゃになっているっていう可能性もあるわね。疲れてたんでしょ。ラムに借りたあのくだらない小説にも、影響を受けてるんじゃない？」

「そうかも……」

俺がグラスに水をついでやると、キリカは一気にそれを飲み干した。

「ふうー、美味しかった！ お代わり、ある？」

相変わらず気持ちいいほどの食べっぷりだ。

「あるよ、ちよつと待ってて」

俺は空になった皿を手に厨房に向かう。

「とにかく、今晚、ラムと一緒にアンタのところに行くわ。もっと詳しく話も聞きたいし、ラムとふたりで行った魔獣討伐の褒賞の葡萄酒もあるのよ。イーサン、美味しいおつまみをお願いね！」

「了解」

ふたりは最近、また王宮内で表彰されたらしい。

こんなすごいふたりと気の置けない飲み仲間になってしまっなんて、やっぱり食べ物の力は偉大だ。

「ラムはもう戻ってきてるんだ？ しばらく出張だっけ聞いてたけど」

俺の言葉に、キリカは耳の下で切りそろえた栗色の髪を揺らした。

「もうすぐ王宮に着くころよ。私もよく知らない極秘任務だったみたいんだけど、今日イーサンの家で飲み会だっけ言ったら、予定をずらして帰ってくるみたい」

「じゃあ、ラムの好きな物も用意しとかなきゃだな」

「またアンタを惑わす精霊が出てきたら、私が剣で真つ二つにしてあげるわよ！」

キリカが、その腰の長剣に手をかけて見せた。

「ははっ、たぶん、もうでないよ。絶対」

俺は笑った。
そうだな、あんなこと、もう二度と、あるはず……

* * *

「おい！」

「ひっ……」

今日の仕事を終えて、家に戻る途中。

あのいつもの近道の木々の茂みから、にゅっと長い腕が一本でてきた。

「お前、王宮で何をしている？」

現れたのは、まさかのあのシヴァ・ミシュラ。

今日も今日とて美しい騎士服に身を包んだその姿は、俺に心からの感動を与えてくれた。

昨日に続いて、今日までも！

生きていてよかった。もう、この際、精霊の化けたやつとかでもいい。許す。

「聞いているんだ。お前、どうやってまた王宮に入り込んだ？ 誰の手引きだ？ こうして毎晩相手の男を探しているのか？」

「えっと、あの、その……」

茂みの中からシヴァが現れただけでもびっくりなのに、矢継ぎ早に質問されては、俺のシヨボい

脳の処理能力ではついていけない。

「今日は誰の相手をするつもりだ」

腕をつかまれ、引き寄せられる。

やっぱり、いい匂いがするう！ そして翡翠の瞳に魂が吸い込まれてしまいそう……

「なぜ答えない？」

苛立った様子のシヴァに、俺はようやく我に返った。

「あ、違う、違うんです！ 俺は決して毎日あんなふうに誰かに声をかけたりなんか、していません」

俺はシヴァに向き直る。

「俺、王宮の第三食堂に勤めている、イーサン・シャルマです。王宮に忍び込んでいるわけじゃありません。仕事が終わったので、今から家に帰るところで……」

「イーサン……」

シヴァが俺の名前を反芻した。

この美しい唇で、自分の名前を紡がれる日が来るなんて！

「あの、昨日は、ありがとうございました！ 俺、本当に、夢みた……」

「今日の相手が決まっていけないというなら、また俺が相手をしてやろう」
ぐっとシヴァは俺の腰を引き寄せた。

「へ……？」